

東京大学へのクリーンエネルギー
導入に向けた提案書

環境三四郎

1.はじめに

地球温暖化における世界と日本の情勢

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)は第四次評価報告書において、地球温暖化の原因は90%以上の確率でCO₂排出等の人間活動であるとし、今後温室効果ガスの排出を抑制しなければ、20世紀に観測されたものよりも深刻な温暖化が高い確率で起こるだろうと予測している。日本は京都議定書において温室効果ガス排出量を1990年度比で6%削減するとする目標を掲げたが、2004年度は8%の増加となった。

東京大学の取り組みと課題

東京大学においては、省エネルギーの努力がなされており、2005年度のCO₂排出量は単位面積・時間当たりでは減少したものの、大学の規模が拡大しているため、総量は増加となった。今後は地球温暖化対策推進法等の施行によりCO₂総排出量の抑制が求められる。そのため省エネルギーの努力を今後も続けていく必要がある。しかし、省エネルギーのみでCO₂排出量を削減することには限界があり、他のCO₂排出量削減策が求められている。その一つとして、発電時のCO₂排出量が少ないクリーンエネルギーの導入を提案する。

クリーンエネルギー導入の効果

クリーンエネルギーの導入は、現状ではコスト面で省エネルギーに劣る。しかし、クリーンエネルギーは研究途上の分野であるが、持続可能な社会の構築やエネルギー安全保障問題に大きな役割が期待される。そのような中、東京大学は日本を代表する教育・研究機関として、長期的視野を持って社会を先導していくことが求められる。地球温暖化のように未だ対応が十分に進んでいない問題に対して大学が実際に取り組む姿勢を見せることは、学生の意識を向上させ、研究・議論を活発化させるであろう。同時に社会へ対して東京大学をアピールすることが出来る。このようにして長期にわたって地球温暖化対策に寄与することで、大学固有の役割を果たすことが期待される。

2. 企画趣旨

本企画の目的：

- ・持続可能な社会構築へ向けて動き出すこと

地球温暖化等の解決を目指した東京大学の積極的かつ先進的な取り組みを学生の側から提案し、その取り組みを社会へ向けて発信していくことにより、持続可能な社会構築に向けての動きをリードしていくことを目的とする。

本企画の目標：

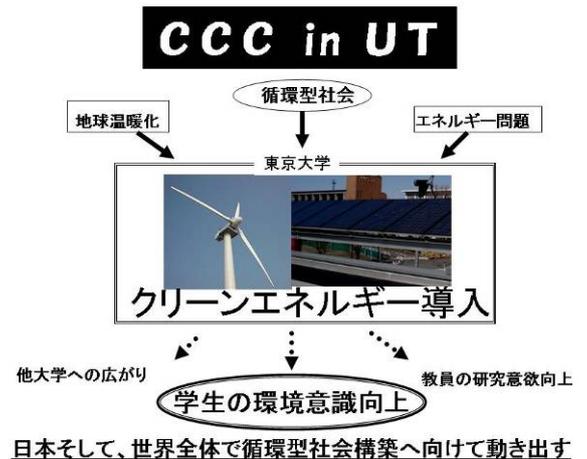
- ・クリーンエネルギーのキャンパス内への導入

持続可能な社会構築には様々な視点での多様な対策が必要であるが、東京大学においての資源・エネルギー分野での対策の一つとしてクリーンエネルギーの導入を提案する。先に述べたようにクリーンエネルギーの導入は持続可能な社会構築のために大きな役割を果たすとともに、**学生の環境意識向上**に対して大きな効果が期待できる。そして東京大学の持続可能な社会構築に向けた**シンボル**となりうる。キャンパス内で学生が日常的に環境やサステナビリティに関して考えていけるような環境づくりを目指す。

本企画の意義：

- ・学生の環境意識の向上

東京大学には未来を担っていく学生が多く在籍しており、学生の環境意識の向上は今後の持続可能な社会構築への大きな推進力となる。本企画は学生に対してクリーンエネルギー導入を通して、学生の環境意識の向上の達成を第一の意義とする。



- ・社会への責任

日本を代表する大学である東京大学が環境対策に積極的に取り組むことは、大学の社会的責任として果たすべきものである。それとともに東京大学が率先してクリーンエネルギーを導入することで他の大学や社会へのより広範に広がっていく。

- ・研究成果の還元

クリーンエネルギーに関する研究を行っている教員もおり、その研究成果を大学内で実際に利用することによって、研究成果を社会へ還元していく第一歩となる。

- ・キャンパスの公共性

キャンパスは学生以外にも不特定多数の人々が利用する。多くの人々にクリーンエネルギーと接する機会を多くの人々に提供することが可能である。

- ・東京大学の理念との一致

本企画のような取り組みは東京大学環境理念・環境基本方針と一致する。

3. 導入の提案

より効果的に学生の環境意識の向上に繋がる形でのクリーンエネルギーの導入の提案として以下の2つを挙げる。クリーンエネルギー導入と連動して、様々な企画を実施していくことで、ただ単に施設を作ることに留まらない効果が期待できる。

①Eco Café

東京大学キャンパスをより環境に配慮しサステナブルにするために、学生が自由に活動が出来る場を創造する。そのスペースのシンボルとしてクリーンエネルギーを導入する。

A.概要

学生が自由に活動を行えるスペースを作り出し、クリーンエネルギーを導入し、電力の一部とする。

多くの学生がクリーンエネルギーを使用することで、身近に感じる事が出来るとともに、このスペースには環境関連の展示物を設置し情報を発信する。また、「学生のEco活動掲示板」を設置し、環境・サステナビリティに関する学生情報を発信し、学生の活動を活性化させる。そして、大学への提案なども行える目安箱のようなものも設置し学生と大学との距離を縮めていく。

そして定期的に環境関連のミニ講演会などを実施し、東京大学にとどまらず様々な人に呼びかけて、東京大学内外の人々を巻き込んで持続可能な社会構築に向けての議論を行う場所を作り出す。

B. Eco Café 完成前

・命名コンテスト

このスペースの名前を広く学生に募集し、命名のコンテストを行う。このコンテストと同時にこのスペースの意義と意味を広めていく。

・Eco Café 広報

環境三四郎のネットワークを利用し、環境に関心のある学生にEco Caféを宣伝する。また、メディアに対しても東京大学の新しい試みを積極的に伝えていく。

C. Eco Café 完成後

・講演会などの実施

Eco Caféのスペースを利用し定期的に講演者をお呼びし、環境関連の自主講座を開催する。環境に関心のある学生にCaféを利用してもらうとともに、学生同士のネットワークを形成する。

・プロジェクトの実施の支援

Eco Caféで出来た学生同士のネットワークを実際に課外活動へと結びつけるために積極的にプロジェクト実施の支援を行う。活動のアイデアの掲示板への掲示や現在行っている活動の発表などを通して学生同士の情報交換を促す。

・環境関連の展示

環境関連の研究を実施している研究室や課題活動を行っている学生たちにご協力を

お願いし、Café での展示を行っていただく。

- ・目安箱

学生の今の活動や意見を広く大学に伝えるために目安箱を Café 内に設置する。

②エコキャンパス化計画

キャンパス内の環境整備とともにクリーンエネルギーの導入を順次進めていく。導入にあたっては学生が身近にクリーンエネルギーを利用できるように工夫を施す。

A.概要

130周年事業の「知のプロムナード」計画や施設・設備の更新の際に積極的にクリーンエネルギーを導入するようにする。学生の身近に施設に次々にクリーンエネルギーを導入することで、より大きな環境意識の向上を目指す。

B.完成前

・導入計画の策定

導入にあたって、導入する目標や導入に向けての方針を策定する。このような計画の第1歩としてのクリーンエネルギーの導入を実施する。策定に際してはクリーンエネルギーのみならず、省エネなども考慮に入れる。

計画の策定は大学・教員そして学生が協力して行う。

・アイデア・デザインの募集

クリーンエネルギーの導入に関する様々なアイデアやデザインを募集する。多くの学生を計画段階から巻き込んでいけるように計画を実施する。

C.完成後

・エコキャンパス大会の実施

環境に配慮したサステイナブルなキャンパスとはどのようなものなのか？

先進的な国内の導入事例や海外での取り組みを行っている人々を招き、今後のキャンパスのあり方を考える場を設ける。

D.クリーンエネルギーの導入案

・ベンチへのクリーンエネルギーの設置

屋外のベンチの快適性をより一層高めるためにクリーンエネルギーを利用した電源をベンチの脇に設置する。学生が屋外で自由に活動できるとともに、クリーンエネルギーを身近に利用することが可能になる。

・屋外照明器具へのクリーンエネルギーの設置

クリーンエネルギーを利用したものに更新していく。

4.現状

東京大学において

1. エネルギー投入量は増加（平成 15 年度～17 年度）
⇒エネルギー消費量削減に向けた対策が必要
2. 本郷キャンパスの割合が大きい（電力量で全体の約 65%）
⇒本郷で対策をする意義が大きい
3. 現時点でクリーンエネルギーを導入する予定はなし

1. エネルギー投入量（総計）

東京大学主要五団地（本郷，駒場Ⅰ，駒場Ⅱ，白金台，柏Ⅰ）におけるエネルギー投入量は，下記の図 1 のように推移している。

平成 15 年度～17 年度において増加傾向にある。また，電力の割合が多い。

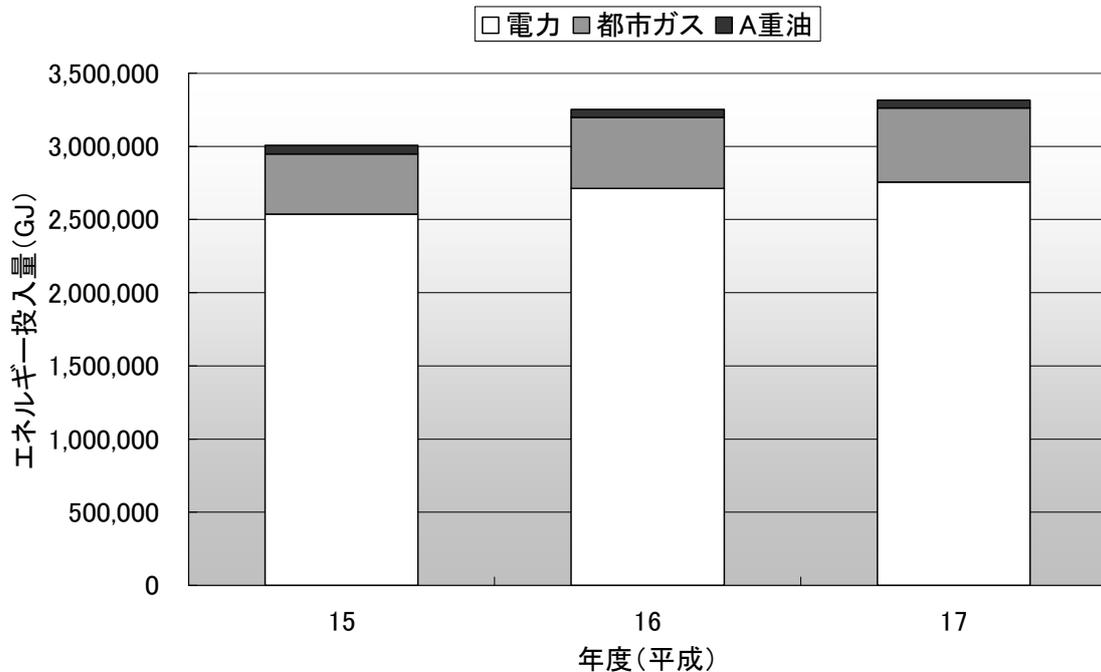


図 1 エネルギー投入量（東京大学主要五団地における）

また、エネルギー投入量と面積のそれぞれの増加量は下記の図2のように推移している。ただし、N年の増加率とは、(N-1)年からN年にかけての増加率とした。

平成16年から17年にかけては、面積の増加率に対してエネルギー投入量の増加率が低く抑えられている。すなわち、単位面積あたりのエネルギー投入量は削減されている。

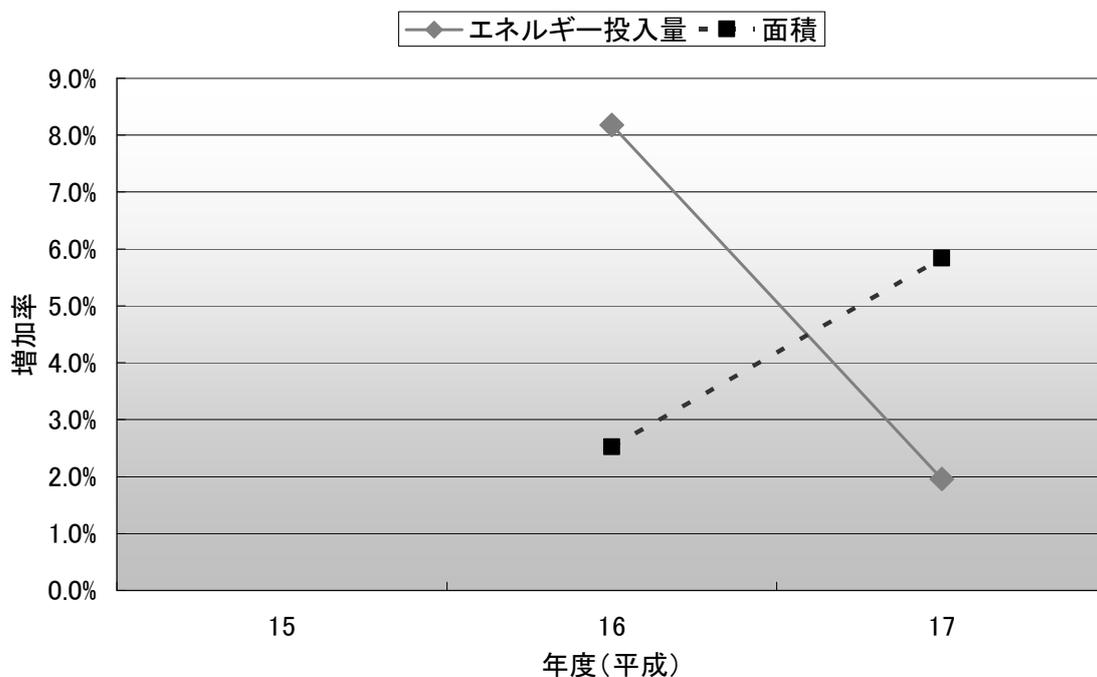
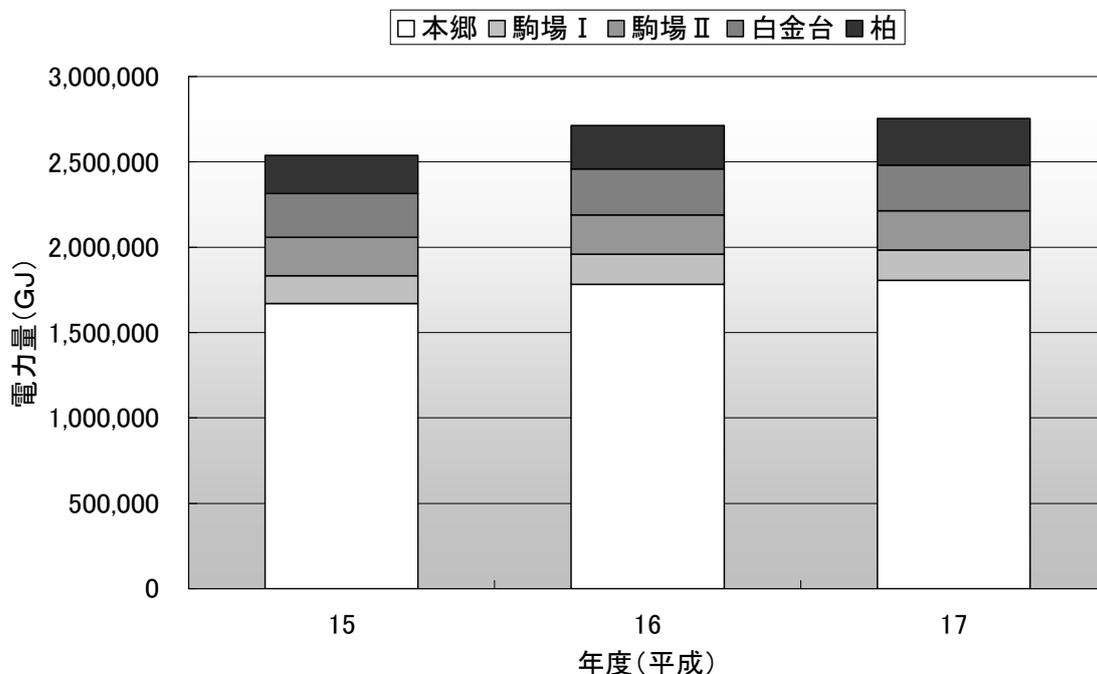


図2 エネルギー投入量および面積のそれぞれの増加率

以上より、東京大学では省エネ化（面積あたりのエネルギー投入量削減）の努力はなされているものの、エネルギー投入量の総量の削減には至っていないことがわかる。

2. 本郷キャンパス

電力量の団地（キャンパス）別の内訳は図3のようになっている。電力量を用いた理由は、図1より東京大学のエネルギー投入量の大部分を電力量が占めるためである。本郷キャンパスの割合が大きい（約65%）。



年度(平成)	15	16	17
本郷(GJ)	1,670,025	1,782,679	1,806,027
駒場 I (GJ)	161,922	176,963	178,004
駒場 II (GJ)	226,199	231,209	229,436
白金台 (GJ)	255,846	267,842	266,868
柏 (GJ)	223,690	254,638	275,187
合計(GJ)	2,537,682	2,713,331	2,755,522

図3 電力量の団地（キャンパス）別内訳

よって、本郷キャンパスにおいてエネルギー投入量削減対策をする意義が大きいといえる。

3. クリーンエネルギー導入予定

クリーンエネルギーを東京大学で今後新たに導入する予定はない。主な理由は、必要な投資額が大きすぎることである。ただし、2007年3月に本部棟屋上に風力発電機（エアドルフィン、ゼエファー社製）1機が実験的に導入された実績がある。

なお、上記の情報は東京大学施設部環境課へのヒアリング（2007年3月5日）によるものである。

4.他大学での導入事例

日本工業大学，桜美林大学，足利工業大学に訪問し聞き取り調査を行った。聞き取った項目は導入しているクリーンエネルギー，導入の経緯，導入による効果と問題点である。

◆日本工業大学◆

太陽光発電システムおよび風力発電システム導入事例

2007年3月9日，施設営繕課課長鈴木氏より聞き取りを行った。



1. 設備

- ・ メインソーラーパネル（本部棟屋上） （写真：ソーラーチューブ本部棟玄関から）
機器： シャープ製 NT-JM1A(単結晶，変換効率 16.4%)
最大出力： 301.3 kW (太陽電池モジュール 131 W×2300 枚)
事業費： 3 億 5,000 万円
(うち，日本工業大学 1 億 7,500 万円，NEDO 1 億 7,500 万円)

- ・ 本部棟屋上のソーラーチューブ（本部棟屋上）
機器： 採光型モジュール(セル枚数 36 枚，光透過率 39%)
最大出力： 13.1 kW
事業費： 4,800 万円

- ・ ダリウス・サボニウス併結型風力発電装置（建設学科棟屋上）
機器： 協和エクシオ製ダリウス・サボニウス併結型風力発電装置
最大出力： 5 kW
事業費： 2,000 万円



(写真：左 風力発電機 右 太陽光・風力発電電力量揭示板)

2. 導入経緯

・ 太陽光発電システム

1995年に施行された「建築物の耐震改修の促進に関する法律」によって、校舎の老朽化に伴う耐震工事と屋上の漏水の改修が必要になったこと。この際、建物を建て替えるのではなく、より建築廃材の出ない耐震補強にすることが決定し、老朽化した建物でも、モジュールを屋根型にして荷重が建物の柱にかかるようにすれば太陽光発電システムの設置が可能と分かった。そこで、太陽光パネルの傾斜角度を3度と水平に近い角度にし、架台に防水性能を持たせた屋根一体型システムを設置することで、太陽光発電システムによる発電と、防水効果をえた。また、屋根一体型システムを用い、荷重を建物側面部分の柱にかけたため、中央部分が空洞となり、その断熱効果のために冷暖房効率が向上した。

・ 風力発電システム

早稲田大学と共同で20年間風車に関して研究している教授の、研究設備として風車の設置が決まった。

3. 導入による効果と問題点

・ 効果

太陽光発電システムの導入によって様々なメディアに取り上げられて紹介されることとなった。また、学内電力の3%(日本工業大学の電力会社との契約電力は2,980 kWであり、理想条件では約10%)をまかなっている。

・ 問題点

一年の発電量は約500万円と小さく、費用を回収するには約70年かかる。また、パネル表面の汚れによる発電効率の低下は大きく、太陽光パネル傾斜角度が小さいため雨水による洗浄がうまくいかないことも一因となっている。

さらに、年間の維持費用も30~40万円かかる。

4. 東京大学での導入にあたり参考にすべき点

・ 太陽光発電量のキャンパスにおける使用電力量に占める割合

	使用電力量	太陽光発電量
日本工業大学	9,000 MWh	270 MWh (3%)
東京大学(本郷)	185,000 MWh	同規模で導入すると約0.14%

- ・ 大学における太陽光発電システムとしては全国最大
- ・ 太陽光発電と屋根をかねた屋根一体型システム

◆桜美林大学◆

風力発電システムおよび太陽光発電システム導入事例

3月12日に学生サークルAsia Wind Ringより聞き取りを行った。

1. 設備

- ・ ダウンウィンド方式風力発電装置（バス停前）
機器： ブルーベン社製 WT-2500
最大出力： 2.5 kW
事業費： 1600万円（太陽光パネルと併せて）
(桜美林大学が全額負担)

- ・ 太陽光パネル（一粒館屋上）

- 機器： (写真：発電量掲示板 バス停前)
最大出力： 1.8 kW（太陽電池モジュール 131 W×2300 枚）
事業費： 1600万円（風力発電機と併せて）
(桜美林大学が全額負担)



得られた電力は一粒館に系統連結され、使用される。

2. 導入経緯

- ・ Asia Wind Ring 発足

2003年12月に環境経済、環境科学を学んでいた学生が中心となり、大学に風力発電機を設置して「エコキャンパス化」を目指すという趣旨の「風力発電機設置に関する提案書」を学長に提出する。その念頭には、アジア全体へクリーンエネルギーを広めていくということがあった。これはモンゴル人留学生がモンゴルの大気汚染などの現状を訴え、クリーンエネルギーの導入の必要性を学生たちが感じたことによる。そして、2004年5月に学生環境プロジェクトチーム「Asia Wind Ring」が発足する。その目的はキャンパス内への風車の設置とモンゴルをはじめクリーンエネルギーのアジアへの普及であった。

- ・ 伊藤章治教授の存在

顧問である伊藤教授が新聞社の出身であり、発足当時からメディアに対して活動をアピールして多くの新聞等でAsia Wind Ringの活動が紹介される。また、学長との交渉に際しても伊藤先生が積極的に参加した。

- ・ 学長との交渉

風車の専門家(足利工業大学・牛山先生)や企業の方とミーティングを重ねて、企画を具体化していった。2004年10月～12月に学長との話し合いを重ね、11月18日～12月7日に風況調査を実施した。12月13日に学長へ最終的な提案書を提出し、風車の設置が決定した。

- ・ 風車設置とその後

2005年3月に風車は完成。風車の完成後、Asia Wind Ringはモンゴルへの風車の寄贈等、クリーンエネルギーをアジアに広めるための活動を実施している。

3. 導入による効果と問題点

・効果

学生が中心となった活動であったことに加えて、伊藤先生の積極的なメディアへのプレスリリースが効果を発揮し、風力発電システムの導入の検討段階から様々なメディアに取り上げられて紹介されることとなった。メディアの露出が大きかったことで、モンゴルへの風車の寄贈の際の資金集めやスポンサーの獲得が効果的に行えた。

・問題点

一年の発電量は極めて小さく費用を回収するには至らない。また学生と大学が協力して建てたため、メンテナンスの主体が曖昧になっている点や風車の意味が学生に十分伝わっていないことが問題として挙げられる。このような原因として風車はクリーンエネルギーをアジアに広めるためのモニュメントとしての意味合いが強い。Asia Wind Ringのメンバーもクリーンエネルギー自体の知識や効率性、採算性に関する関心は低かった。

4. 東大での導入にあたり参考にすべき点

- ・学生と大学とが協働して導入を検討する際の行動のとり方
- ・学生の活動を理解し、支援してくださる教員の存在
- ・新聞取材や学内誌への投稿、本の出版など広報活動の広範さ
- ・導入後のメンテナンスを行う主体を明確に定める必要がある

◆足利工業大学◆

風力発電システム，太陽光発電システムおよびバイオマス発電システム導入事例

3月27日足利工業大学総合研究センター長 牛山教授，同センター所属西沢氏より聞き取りを行った。

1. 設備

◇トリプル・ハイブリッド発電システム

以下の3つの発電システムを併せてトリプル・ハイブリッド発電システムとして2003年度に導入した。

平成15年度私立学校施設整備費補助金およびGIAC（広域関東圏産業活性化センター）の平成15年度グリーン電力基金助成を得て建設。

・ 風力発電

機器： 富士重工製 SUBARU15/40
最大出力： 40 kW
事業費： 4,000 万円

・ 太陽光発電

機器： 三洋電機製 HIP-190B2(単結晶，変換効率 16.1%)
最大出力： 20.59 kW (190 W のモジュール×108 枚)
事業費： 3,000 万円

・ バイオマス発電

機器： 足利工業大学が設計（企業との共同研究）
最大出力： 20 kW
事業費： 1,600 万円
木質系バイオマスを燃料として可燃性ガスを発生させ，エンジン発電機に供給することで発電する方法で導入。



(写真：バイオマス発電)

・ 電力系統

事業費： 1,000 万円
電力は総合研究センターとその周辺の建物に系統連系により供給している。

◇風と光の広場

1995年3月に，太陽光発電と風力発電の公開野外実験施設として開設。

2001年5月からは「水」と「木」をテーマにした施設を加えてリニューアルした。各種のマイクロ風車，風力揚水式ポンプ，ソーラーパネル，水撃ポンプ，太陽光観測システム，日時計，水時計，ビオトープ，屋上緑化された「ミニミニ博物館」，ソーラークッカーなど数々の設備が集まり，小中学生の「総合的学習」の時間を利用した環境教育の見学会，高等学校の風車製作実習，企業の研修会などに利用されている。

発電された電力は広場内の電灯として利用されている。

2. 導入経緯

・ トリプル・ハイブリッド発電システム

自然条件に依存する風力発電と太陽光発電に加え、人為的に出力を調整可能なバイオマスガス化発電を組み合わせたことが特徴のトリプル・ハイブリッド発電システムとなっており、電力供給の安定化を図るべく実証試験を行うことを目的に設置された。牛山教授(副学長・足利工業大学総合研究センター長)の後押しもあり、実現した。

・ 風と光の広場

牛山教授が中心となっていた IEC（国際電気標準会議）の委員会のメンバーと話したことをきっかけに、風車を実演する場所を大学内に作ってはどうかとメーカーに提案したところ、国内外のメーカーから賛同を得た。同時期に足利市から土地譲渡の話があり、その土地に複数の風力発電機を併設していく運びとなった。理事長および理事会の理解も、風と光の広場設置を推し進めた。



(写真：様々な風車が並ぶ風と光の広場)

3. 導入による効果と問題点

・ 効果

小中高生の見学を多く受け入れており環境教育を行うためのよい場所となっている。同時に説明の際に研究室の学生に手伝ってもらうため、大学生への教育効果も高いと考えられる。また、発電した電力を総合研究センターとその周辺の建物に供給できた。

・ 問題点

バイオマス発電は実験的な装置であるため連続稼働時間が短い。また、発生したタールの処理が問題となっている。

4. 東京大学への導入に関して参考となる点

- ・ 説明、展示を充実させることで学生や訪問者に対する広報、教育効果が期待できる
- ・ 説明、展示の運営に学生が関わることにより、学生が大学や大学外の人と交流するきっかけができる

- 複数の発電システムを組み合わせることで電力供給の安定性が向上する
- 実験施設は既製品よりも実用性が劣る



(写真：ミニミニ博物館の屋上緑化)



(写真：ミニミニ博物館内部)

◆フェリス女学院大学◆

風力発電システム，太陽光発電システムの導入事例

6月5日フェリス女学院大学・緑園キャンパスにおいて国際交流部佐藤輝助教授より聞き取りを行った。

1. 設備

◇キャンパス中央の風力発電

- ・風力発電

機器：エジソンパワーズ製 親和電機施行

最大出力：1 Kw

事業費：700 万円

◇体育館クラブ部室棟屋上の太陽光パネル

- ・太陽光パネル

機器：TVKハウジング製

最大出力：6.43 Kw

事業費：600 万円

◇屋外街灯 3基

- ・ハイブリット街路灯

機器：池戸電機工機製

最大出力：風力 300w・太陽光 110w

事業費：150 万円



写真：体育館クラブ部室棟屋上の太陽光パネル

以上の3つは事業費は半額 NEDO（新エネルギー財団）による負担。GIAC（広域関東圏産業活性化センター）からの助成もあり。

◇正門付近の発電量等表示ビジョン

- ・エコビジョン

機器：アイチ電機製

事業費：150 万円

→ Web ページで行うのと同様に表示画面を編集することが可能。

発電量のほか，その都度 トピックを流している。

◇クリーンエネルギー以外の施設

- ・エコキャンパスプロジェクト

フェリス女学院緑園キャンパスにはクリーンエネルギーのみならずビオトープ，屋上緑化，壁面緑化やクールチューブそして雨水の有効利用などキャンパス全体で様々な試験的な環境対策を実施している。

これらの環境対策が有機的に結合させることで学生への環境意識の向上を目指している。

2. 導入経緯

学生の話がきっかけで本間慎教授（現在学長）が当時の学長と話をを行い，実際の

設置に向けて動きだした。環境対策に関心が深かった本間慎教授は学生のアイデアを積極的に取り入れてキャンパスの整備につなげていった。

本間教授が環境対策に理解があり、積極的であったために導入されたといえる。実際の業者の選定や助成金の申請などは佐藤助教授が行っている。

また、採算や経済性は度外視して、様々な種類のクリーンエネルギーや環境対策を学生たちの目に見える形で行うことで教育効果を高めようとしている。

3. 導入による効果と問題点

・効果

長期休みには小中学生とその親を対象にした親子講座を開講している。その中ではエコキャンパスの見学や自然のエネルギーを利用した体験プログラムそしてキャンパス付近の生き物観察などを行っている。これらの活動は周辺住民とキャンパスを繋げる重要な役割を担っている。これらの活動の主体も大学生であるため、大学生への教育効果も高いと考えられる。

また学生へのアンケートによると上級生になるほど環境意識が高まっていることが見受けられた。

・問題点

メンテナンスの費用。特に風力発電は費用が高い。

4. 東京大学への導入に関して参考となる点

・説明、展示を充実させることで学生や訪問者に対する広報、教育効果が期待できる

・説明、展示の運営に学生が関わることにより、学生が大学や大学外の人と交流するきっかけができる

・学生と教員との親しい関係が大切である

◆東京大学◆

風力発電システムの導入事例

6月27日 AGS 推進室戸上先生より聞き取りを行った。

1. 設備

◇本郷キャンパス第2本部棟屋上の風力発電

・風力発電

機器：ゼファー製 エアドルフィン

最大出力：2.5Kw

事業費：150万円

風車本体：120万円

取り付け工事費：17.4万円（トーヨー電機）

電気系統：14万円

費用はすべて AGS が負担。

電力は第2本部棟4階の AGS 推進室の電力の一部。また4階には発電量の表示板あり。

2. 導入経緯

再生可能エネルギーを AGS 推進室で使ってみようということで計画が始まった。当初は発電した電力で1回の液晶テレビの電力を賄う予定であったが、電気系統や蓄電設備などの問題で諦めた。

この製品を選んだ理由としてはエアドルフィンの開発に AGS のメンバーである荒川忠一教授の研究室が関わっていたからである。

3. 導入おける障壁と広報活動

・障壁

予算。そのほか景観などにも配慮を行ったが、予算が一番の問題であった。

・広報活動

4階の配電盤の横に現在の発電量と累計発電量を表示する予定。

また、AGS のウェブページに風車の様子をリアルタイムで流す予定。

4. 東京大学への導入に関するアドバイス

・導入に際してはトップダウンで物事を決めていくのが一番いいと思う。



文責
小川拓哉（農学部 4 年）
神戸康聡（工学部院 1 年）
広瀬雄一郎（工学部院 1 年）
市川雄介（法学部 4 年）
鈴木聡（工学部 4 年）
宮森映理子（農学部 4 年）

プロジェクトメンバー
本郷
竹内翔（農学部 4 年）
三宅もえ（農学部 4 年）
安藤達也（工学部 3 年）
小泉賢一（理学部 3 年）
駒場
尾形玲美（学部 2 年）
高坂文彦（学部 2 年）
鷺谷智（首都大学東京 2 年）
堀川優季（学部 2 年）
雨宮新（学部 1 年）
河村直哉（学部 1 年）
三上貴司（学部 1 年）